

第四章 『土台穴』と『ためになる』における受動性と受難

第二章と第三章を通して、1926年から1935年のプラトーフ作品における漸進的な変化を検討した。そこで分かったのは、プラトーフ作品において繰り返し主要な登場人物として現れる放浪者が、次第に自然との関係を変化させ、受動的な存在となるということだった。そして『ジャン』ではっきりとしているのは、そのような変化において放浪者が身体的な毀損を蒙っているということである。言い換えれば、それら二つの章で検討した、作品の変化は、放浪者が受難者へと変化していく過程としても捉えることができる。この視点を踏まえると、上記の変化をより重層的に捉えることができる。それは、人間による観照や操作の対象ではないものとしての自然がはっきりと打ち出された『土台穴』において、受動的な存在としての人間もまた多様な側面から描き出されているということである。このとき、人間を凌駕するものとして現れるのは自然にとどまらない。言語的環境も含めた世界が、人間を受動的にさせているのだ。そこにおいて、第一章の冒頭に、飛散する花粉のイメージを喚起するものとして含められていた、言葉がもつ重要性が現れてくる。その場合、すでに第二章での検討において現れた「全面的な闇」のように、『土台穴』における言葉が、同時代の政治的な言説を仄めかすものである点に注意する必要がある。飛散する花粉のイメージは、いかなる日付も入っていない無時間的なものである。しかし、『土台穴』における言葉に着目して議論を行うときには作品の成立年代を踏まえ、作品の歴史性を強く念頭に置くことが不可欠になる。

第二章と第三章では、作品の変化を捉える目的から、人間と自然の関係という側面に注目してきた。それに対して第四章ではこのうち『土台穴』、およびほぼ同時期に書かれた『ためになる』に限って、人間の受動性に着目した議論を行なう。すると、この側面から検討を加えても、放浪者的な登場人物であるヴォーシェフが受動性をもつ登場人物として現れることがわかる。同時に判明するのは、放浪者の持つ受動性の特徴である。それは、活動家とヴォーシェフの対比においてははっきりと現れる。

1. ソ連における「偉大な転換」

『土台穴』と『ためになる』は、ソ連において新経済政策から農業集団化への転換が起こった 1920 年代末の歴史的現実深く根ざした作品である。この前後のソ連における政治的、経済的な変化について振り返っておこう。

多くの歴史書において 1920 年代末の急激な集団化を振り返る際に使われる「偉大な転換」という言い回しは、1929 年の 11 月にスターリンがプラウダに掲載した論文『偉大な転換の年 Год великого перелома』からとられたものだ。1929 年に決定され開始された第一次五カ年計画の最初の成果を振り返るこの論文において、反官僚主義・自己批判 *самокритика* キャンペーン、無断欠勤に対する対策、そして無休操業により労働生産性が向上した、と第一に指摘される。第二に、ソ連を資本主義から自立した国家として発展させる上での重工業の重要性が説かれた上で、この分野で 1929 年にソ連はすでに顕著な成長を遂げたことが説かれる。その上で第三に強調されるのが、ソ連の農業をコルホーズへと集団化することの必要性であり、その上で、工業の五カ年計画と農業の五カ年計画こそが社会主義建設の二つの要であるとスターリンは主張する。以上の三点に、この時期のソ連の激変の重要な要素が要約されているといい。

まず、第二の論点と第三の論点は、第一次世界大戦後にレーニンが導入した、企業の国有化を解除し、かつ農産物の自由な取引を認める新経済政策（ネップ）からの転換に関わっている。「偉大な転換」に至る経緯を振り返っておこう。

新経済政策によって復興を遂げつつあったソ連のボリシェヴィキにおいて主流だったのは、ネップを長期的なパースペクティブにおいて維持し、農業を育成することで農民を社会主義的な経営へと移行させることをとらえたブハーリンの理論である。また、左翼反対派のプレオブラジェンスキーは、工業製品の価格を高く、農産物の価格を国家が低く設定することで工業への投資を優先する社会主義的本源的蓄積をとらえた。この双方に共通するのは、もっぱらソ連の国民経済の内部での政策に議論を限定していることである。それに対し、同じく左翼反対派とされたトロツキーが主張したのは、ロシアにおける経済成長を急速な工業化により達成することが必要であると同時に、西欧諸国におけるプロレタリア革命の成功こそ、ロシア革命が成功する必須条件であるということだった。

権力闘争と軌を一にしたこの論争において、党派の主張の相対的な関係を巧みに利用しつつ多数派工作を行なったスターリンは、まず一国社会主義を肯定してブハーリンの側に

つき、トロツキーを始めとする左翼反対派を攻撃した。ソビエトの諸機関を自由に調査する権限をもった労農監督部の責任者の地位にあつて指導力を伸ばしていたスターリンの権威は、この左翼反対派との闘争の過程で高まってゆく。そのことは、理論的な水準とは離れたところでスターリンの指導力を押し上げていった。そのことが明白になるのは、1927年に左翼反対派の多くが除名されて以降のことである。つまり、1927年12月の第15回党大会で採用されたのは、ブハーリンの主張とは相容れない、急速な集団化の方針だったのだ。さらに、広く議論されてきた経済の計画化に関する議論において、現状からの経験主義的な発展の政策が否定され、目標を第一に設定する「工学的設計の方法 *методы инженерной проектировки*」が選択された。また同じ党大会において五カ年計画に関する目標値が示された。このことの背景には、第一次世界大戦後の資本主義諸国における経済的な安定に加えて、1927年に中国における利権をめぐる対立からイギリスがソ連の外交を断絶したという事情がある。

この時点ではスターリンは、同じ大会でまとめて除名されたばかりの左翼反対派から、急激な経済成長の主張を継承したことになる。こうした政策のレベルでの転換に加えて、1928年春に、政府が設定した穀物買取価格が低すぎたことが原因で、農産物が全般に豊作であったにも関わらず穀物調達危機が生じた。これがきっかけとなり市場が閉鎖され、新経済政策が事実上の終焉を迎えてしまう。この非常措置をめぐるスターリンと対立したのがブハーリンである。漸進的な成長を主張するブハーリンは、スターリンと対立し右翼反対派として攻撃され、自己批判を強いられてしまう。

1927年に提示された第一次五カ年計画案は、ゴスプラン議長の推す「出発案 *отправной вариант*」とヴェセンハ（全ロシア国民経済会議）の推す「最適案 *оптимальный вариант*」の二種類があった。そのうち、1929年4月の党協議会で採択されたのは、工業生産を180%増大させることを目指す「最適案」だった³⁴。この目標には達しなかったものの、工業生産は大恐慌化の資本主義国には見られない高度成長を遂げていった。

ここで注目すべきことは、この急成長と同時に、ブルジョア出身の専門家と労働組合指導部に対する攻撃が進んだことである。この文脈において起こった事件には、1928年のシャフトゥイ裁判、1930年の「産業党」裁判などがある。このうち、シャフトゥイ事件は、ドンバスでドイツ人技術者ら53人の専門家が「妨害活動」の容疑で摘発された事件であ

³⁴ 富田武『スターリニズムの統治構造』、岩波書店、1996年、17頁。

る³⁵。すでに述べた通り、1928年はブハーリンとスターリンが対立している時期にあたっていたために、右翼反対派に対する攻撃の文脈でこの事件は処理され、国外だけではなく、国内に存在する階級的な敵に対する「警戒心 бдительность」を高めるためのキャンペーンとしてこの事件は利用された。また、「産業党」事件においては、政府機関に対する破壊工作の容疑で、ヴェセンハなど経済機関のブルジョア出身、および旧メンシェヴィキ出身の専門家が逮捕された。彼らに替わって、省庁や企業ではプロレタリア出身の労働者が専門家として大量に採用された³⁶。

『偉大な転換の年』の第一の論点であった、自己批判および反官僚主義のスローガンは、この文脈で、大衆による官僚批判という文脈で用いられたものである。1920年代末のこの状況は、同じ時期に進行した文化革命とも関連している。1929年にルナチャルスキーが、工科大学（высшее техническое учебное заведение）と工業専門学校（техникум）を管轄下においていた教育人民委員部を辞職したときに、教育の分野における文化革命が始まった。大量のプロレタリア専門家を短期間に育成するという必要を感じていたヴェセンハは、これらの教育機関を自らの管轄下に移したのである。さらに、中等学校の8-10年生は工場やコルホーズの付属となった³⁷。後に述べるが、文学の領域においても、ラップ（ロシア・プロレタリア作家協会）が、スターリンに後押しされたアヴェルバツハが「プロレタリア文学のポリシェヴィキ化」を主張し、ネップ期文芸政策の基準となっていた、文学上のもろもろの潮流の自由競争を是とする1925年の中央委員会決定を否定したことを機に、文学上の文化革命が開始された³⁸。

ブルジョア出身の専門家の排除をとまなう急進的工業化は、市場による調整を欠いたまま、不均衡をはらみつつ進行したため、1930年夏には、生産テンポの鈍化や原材料供給中止による操業停止を招いた³⁹。このような軋轢が政策に反映されたのは1931年半ば以降のことで、急進路線が修正されるとともに、有罪判決を受けた専門家が再び雇用された⁴⁰。

社会主義的工業化に話を戻せば、工業において起こった極端に急進的な目標の達成をめぐる軋轢が、より悲惨な形であらわれたのは、農業の集団化においてのことである。当初、第一次五カ年計画において農業集団化は、全戸数の20%と設定されていた。しかし、1929

³⁵同上、20頁。

³⁶同上、20頁。

³⁷同上、27-28頁。

³⁸同上、28頁。

³⁹同上、20頁。

⁴⁰同上、21・33頁。

年秋のヴォルガ下流地方ホピョール管区などの地域において、村まるごとの集団化、つまり全面的集団化が実施されたことにスターリンは触発され、「偉大な転換」という意義をこの成功に与えた⁴¹。そして1929年11月の中央委員会で決定されたのが、穀物の主要な産地における集団化を一年以内に完了するということだった⁴²。さらに、12月のマルクス主義農業専門家会議では、「階級としてのクラークの絶滅」を宣言した。その結果、1929年から1930年にかけての秋播き完了から春播き準備の期間に、1929年の穀物調達と平行してこの決定は実行された。村の共同体の総会において、オゲペウ（合同国家政治保安部）の監視のもとで、党の全権代表が読み上げるコルホーズ設立決議に反対がないことをもって農民の自発的なコルホーズ創設とみなすという、強制的な集団化が展開された⁴³。これに対して農民は、家畜の大量屠殺、赤軍の出動が必要なほどの武装蜂起によって抵抗した。蜂起は、1930年1月から3月までに、2200件以上を数えた⁴⁴。このような社会的な混乱に接して、スターリンは1930年3月に『成功による眩惑』を発表し、そのなかで、集団化における行き過ぎや自発性の原則の無視を認めた。一方、その責任は現場の活動家に帰したため、地方の機関と活動家には困惑が広がった。農民たちはこれを受けてコルホーズを脱退し、集団化率は一挙に下がった。しかし1930年から1931年春にかけて再び集団化は急進化した。これと平行して追放された富農、つまりクラークはラーグリに収用されたり、鉱山や建設現場などで使役されたり、都市に逃亡したりした。このような急進的な集団化は、苛酷な穀物徴発を伴い、それは1932年から1933年にかけての冬に大規模な飢饉を招いた。その死者は300万人から400万人と言われている⁴⁵。

割高な価格で農民に工業製品を購入させ、外貨獲得のために穀物を輸出する政策は、なにより農業の振興を上記のように犠牲にしつつ、工業の発展を成功させていった。1933年から1937年にかけての第二次五カ年計画においては、「英雄的労働、新建設のパトス」を組織することに成功した第一次五カ年計画よりも緩やかな成長をしつつ、設備投資ではなく、それらの設備のマスター освоение を行なうことが課題とされ、おもに機械製作工業が順調に発展を遂げていった⁴⁶。農業においては、穀物調達が厳格に行なわれる一方で、1935年にはコルホーズ員が菜園や家畜を個人経営のために利用することが認められた。こ

⁴¹同上、22頁。

⁴²同上、22頁。

⁴³同上、23頁。

⁴⁴同上、23頁。

⁴⁵同上、26頁。

⁴⁶同上、45-46頁。

のような、農民への抑圧緩和は、1933年5月8日のスターリン・モーロトフ秘密訓令において、1929年以來の大量弾圧の政策が撤廃された時点で密かに始まりつつあった。工業部門において前科のある専門家が再び登用されていくのに平行して、いつとき排除されていた富農（クラーク）も、一定の手続きのもとで市民権を回復することができるようになった。それと同時に、たとえばブハーリンが1934年に『イズヴェスチヤ』の編集長になり、流刑になっていたプレオブラジェンスキーが復党するなど、もとの反対派に対する抑圧も1930年代半ばにかけて緩和されていく⁴⁷。このような政治的に寛容な雰囲気の中で、ソ連において社会主義が勝利したことを前提として1936年に憲法が改正された。この新しい憲法がいわゆるスターリン憲法である。ここで普通選挙が採用されたが、共産党一党制は保持された。

しかしこのような抑圧緩和はいわば、〈小春日和〉であり、1936年から1938年にかけて、内務人民委員エジョフのもとでの、旧反対派に対する大規模な弾圧、いわゆる大テロルが展開されるなかで、この二人も死亡することになる。テロルが進行する過程で、弾圧の対象は拡大され、過去に反対派と接触したものすべてを「人民の敵」として摘発することが目指された。この目的で、人民委員部や党組織で活動家(актив)の集会が開かれ、「人民の敵」およびこれに寛容だった幹部への批判と糾弾が行なわれた。さらに、市民権を取り戻したクラークも弾圧の対象となった。そして、ここで反復されることになるのは、第一次五カ年計画にともなうクラークに対する弾圧の構造である。1936年から1938年にかけて、68万人をこえる人々が銃殺されていくなか⁴⁸、テロルの行き過ぎを警戒したスターリンが、党員に対して弾圧をすることで警戒心の不足という非難を免れようとする出世主義コミュニスト карьеристы-коммунисты に対する闘争を指示した⁴⁹。つまり、大規模な弾圧に末端で携わったものが、弾圧の終わりとともにその責任を問われて弾圧されるという事態がここでも繰り返されたのである。そして、エジョフが1938年に内務人民委員を解任されることで大テロルは収束していった。

大テロルであいた大量のポストを埋めたのは、スターリンが1924年に行なった「レーニン記念入党」の世代の党員だった。そして1938年には『全連邦共産党(ボ)史 小教程』が公表され、レーニン主義の解釈の正典となった。さらに1938年から1942年にかけて

⁴⁷同上、49-51頁。

⁴⁸同上、77頁。

⁴⁹同上、82頁。

での第三次五カ年計画では、軍需生産が優先され、戦時体制が敷かれてゆく。

『土台穴』と同時代史との密接な関わりについて鮮やかに示して見せたのはゾロトノーソフである。まず、ゾロトノーソフは、『チェヴェンゲール』と『土台穴』が書かれた時期の政治的文脈をつぎのように総括する。

戦時共産主義の時期のソ連を舞台とする『チェヴェンゲール』の執筆が始まったのは、戦時共産主義のあとに採用された新経済政策（ネップ）が穀物調達危機によって廃止される直前の1927年のことである。ゾロトノーソフが主張するのは、新経済政策が農民を除いたソ連の多くの階層において暫定的で受け入れがたいものであり、1920年代後半に穀物調達危機が生じたときに、戦時共産主義のときのような強制的で過激な穀物徴発の復活を望む世論が形成されたということだ⁵⁰。そしてプラトーフが、この同時代の現実、つまり集団化の政策に正面から取り組むのが『土台穴』を始めとする『チェヴェンゲール』以後の作品である。同時に、反復する歴史という視点において、ゾロトノーソフによって見出されるのは、二つの時代、および二つの作品における差異である。まず、第一次世界大戦からネップに至る時期にドゥヴァノフやコピョンキンらが共産主義の具現化を見ようと放浪する『チェヴェンゲール』に対して、社会主義的工業化による一国社会主義の建設が進む時期を扱う『土台穴』においては、放浪というモチーフよりは、巨大な住宅の建設というモチーフが優勢となる。

その結果、『土台穴』の細部においてなされるのは、そのような政策を担うソヴィエト政権の言説との論争である。『偉大な転換の年』と、『土台穴』の引用を付き合わせつつゾロトノーソフは、スターリンの論文における集団化に関する言及が活動家のエピソードにおいて反映されていることを指摘している⁵¹。たとえば、活動家が、自らの報告のなかで「о ликвидации посредством сплава на плоту кулака как класса(К.293/Ч.Т.2.369) 筏で浮送することによる、階級としての富農撲滅に関して」書くにあたり、「富農 кулака」の後にコンマを打てなかったというエピソードが分析される。「…として」と訳される、事物の資格をあらわす接続詞 как の前にはコンマはつかないのが普通であるが、にもかかわらずこのエピソードにおいて活動家がコンマを打ちそうになったのは、スターリンの文書における表記の揺れを反映したものだという。その根拠としてゾロトノーソフはスターリンの論

⁵⁰Золотонос М. Ложное солнце. («Чевенгур» и «Котлован» в контексте советской культуры 1920-х годов.) // МТ, С. 264–266.

⁵¹Там же, стр.272.

文を挙げる。スターリンが「階級としての富農撲滅」を指示した 1929 年 12 月のマルクス主義農業専門家会議におけるスターリンの文書には、「階級としての富農撲滅 кулака как класса」の言い回しにコンマがあり（具体的には кулака の後に打たれることになる）、それから一ヶ月足らず後の論文『階級としての富農撲滅の政策の問題によせて』という論文には、この言い回しにコンマが無かったというのだ⁵²。

そして、つぎにゾロトノーソフは、『チェヴェンゴール』におけるブルジョア撲滅が黙示録的であるとしたら、『土台穴』における富農撲滅はむしろ異教的であると指摘しつつ、この時代のグロテスクな現実が、作品の超現実的な印象を与える形象として書き込まれていると書く。そのような異教的で超現実的な形象のその代表的な例として挙げられるのが、富農撲滅に参加する、鍛冶工をしていた熊である。伝承において、地中に埋められ災いをもたらしていた物を見つけ出すという役割をもった熊は、富農撲滅において同じ機能を果たしている⁵³。ヴォルガ河中流のある地域では革命が異教として捉えられており⁵⁴、また、1920 年代のモスクワでは頻繁に、飼い主に導かれた熊が見られたという民俗学者シェレメチェヴァの証言⁵⁵があるゆえに、『土台穴』のこの形象も、超現実的ではなく、優れて現実的なものなのだ。このようなゾロトノーソフの読解は、この作品が置かれた文脈を意識しつつ、全体のプロットにおける役割が一見小さな箇所こだわることの重要性を教えてください。

2. 『土台穴』と『ためになる』の執筆時期

『土台穴』や『ためになる』はいつ書かれたのかという問題は、進行中の農業集団化をどの程度把握しながら作家が執筆を行えたか考察する上で非常に重要である。それは、史的現実に対する作者の態度を判断するうえで決定的な意味を持っている。しかし、これらの作品の執筆時期は正確には知られていない。ただそれが『偉大な転換の年』より後に書かれたことは、確実なようである。『土台穴』の、現在残されている原稿は三つある。それは、タイプで打たれた第一段階の原稿（第一稿）、ロシア連邦文学芸術アルヒーフ（РГАЛИ）に収蔵されている、プラトーフによる添削が入ったタイプ原稿（第二稿）、

⁵²Золотонос М. Ложное солнце. («Чевенгур» и «Котлован» в контексте советской культуры 1920-х годов.) // МТ, С. 273–274.

⁵³Там же, стр.281.

⁵⁴Там же, стр.278.

⁵⁵Там же, стр.281–282.

そしてロシア文学研究所（ИРЛИ）収蔵のタイプ原稿（第三稿）である。以上の三種類の原稿をもとにしてテキストの添削状況を詳細に示した、グロズノワらの編集による『土台穴—テキスト、創作過程をつたえる材料 Котлован – Текст. Материалы творческой истории』における分析を参照しよう。

『土台穴』の第二稿の表題部分には「1929年12月—1930年4月」と記されている。二つの時点は、農業の集団化における二つの重要な局面に対応している。つまり、スターリンによる農業問題専門家の会議での、農業の集団化と「階級としての富農撲滅」の課題についての決定がなされたのが1929年の12月であり、そして、『プラウダ』紙に、活動家の行き過ぎの責任を末端の活動家に負わせる「コルホーズ員同志に答える Ответ товарищам колхозникам」というスターリンの論文が掲載されたのが1930年の4月なのである。また、『ためになる』にも同じような歴史的な時点への言及がある。『ためになる』の冒頭において「精神的貧農」たる語り手は1930年の3月にモスクワを出ることが述べられているが、同じ月にスターリンがいまのべたような文脈において「成功による眩惑 Головокружение от успехов」を掲載しているのである。これが従来の研究において『土台穴』の執筆時期と同一視され、急激な集団化を描いたこの作品が、事態の進行と並行して書かれた作品だと見なされてきた。しかし、それに対し、これらの日付は『土台穴』における終末論的なテーマを史実に具体的に対応させるためのものだとグロズノワらは主張している⁵⁶。

以上の情報を総合し、『ためになる』が『赤い処女地』誌に掲載されたのが1931年であることを考慮すると、『土台穴』と『ためになる』はほぼ1930年から1931年の間に書かれたと考えられる。すると、これらの作品は、プラトーフが農業人民委員部を辞職し、重工業へと技師としての活躍の場を移行させつつあった時期のものであるということになる。1899年に生まれた作家は「偉大な転換」の年である1929年に30歳を迎えていたが、この事実は、『土台穴』の登場人物であるヴォーシェフが30歳の誕生日に工場を解雇されて放浪を始めるという冒頭部分と響きあっている。

『土台穴』と『ためになる』の分析に移るまえに、二つの中編が成立した背景に関する注目すべき細部を記しておこう。『土台穴』のエピソードが起こる場所は、巨大な「全プロレタリアート住宅」の建設が進む町と、「階級としての富農撲滅」が進む村の二つに分

⁵⁶ Платонов А. Котлован: текст, материалы творческой истории. СПб., 2000. С.119.

けられる。後半部分にあたる村でのエピソードは、1930年に書かれた映画脚本『作業員 *Машинист*』を基にしているとコルニエンコは指摘している⁵⁷。具体的には、主人公による活動家の殺害と、その後の、村人たちの団結というプロットが『土台穴』の後半部分と共通しているという。注目すべきことは、『作業員』の撮影現場としてプラトノフが、1926年に土地改良技師として関わったことがあり、モスクワに移ってから気にかけていたチーハヤ・サスナー川を推薦していることである⁵⁸。『土台穴』のクライマックスで、富農たちが筏で川に流されるのだが、その際にこの川が念頭に置かれていたとしても不思議ではない。そしてこの川の干拓事業に関しては、『ためになる』でも触れられている。つまりここでは、これら二つの作品、さらにはプラトノフの技師としての仕事と作家としての仕事が、チーハヤ・サスナー川を媒介として結びついているのである。

3. 『土台穴』における受動性と受難

本論文の第二章および第三章での議論では、受動性は主として、漂泊という実践を続ける放浪者においてこれまでは見出されてきた、しかし、すでに第二章における『土台穴』の要約で分かる通り、この作品には、何らかの作用を被るという意味での、受動性、あるいは革命に対する自主性の欠如としての受動性 *пассивность* が顕著に観察される。たとえば、土台穴を計画に従って従順に掘削する労働者たちは住宅建設のプロジェクトを受け入れるだけで、それに対して能動的にふるまう可能性を奪われている。集団化に熱狂する活動家たちは中央から送られてくる指令を受け入れるだけで、それに対して能動的にふるまう可能性を念頭においていない。ゆえに、受動性を何らかの作用を被る状態という広い意味で理解しつつ『土台穴』を考察することは、この作品における自己の滅却、そして熱狂といった現象を総合して扱うことを可能にすると思われるのである。『土台穴』の登場人物において支配的な受動性を、作品に即して検討してゆこう。

3-1. 『土台穴』における権力(1)：労働者と富農

『土台穴』における受動性を語る場合、まずは土台穴の掘削という事業に対してすべての力を注ぐ労働者たちが、義務に従順な、受動的な存在として現われてくる。「Вскоре вся артель, смирившись общим утомлением, уснула, как жила: в дневних рубашках и верхних

⁵⁷ Корниенко Н. В. История текста и биография А. П. Платонова (1926-1946). М., 1993. С.140.

⁵⁸ Там же, стр.141.

штанах, чтобы не трудиться над расстегиванием пуговиц, а хранить силы для производства(K.261/Ч.Т.2.343)ほどなくしてアルテリ全体は、共通の疲労でしずまって、昼のシャツとズボンを身につけたまま、ボタンをはずすことに手間をかけず、生産のための力を保つために、起きているときのように寝入った」と描写されるアルテリの労働者の生活は、労働と睡眠の二つのみによって成り立っている。傷病兵のジャーチェフが、夜に労働者の一人であるチークリンを、労働者たちの眠るバラックに訪ね彼を呼ぶが、「После звука еще более стала заметна ночь, тишина и общая грусть слабой жизни во тьме. (K.246/Ч.Т.2.330) [ジャーチェフのたてた] その音のあとで夜、静けさそして闇の中の弱々しい生命の集団的な悲哀は一層顕著なものとなった」というエピソードは、全プロレタリアート住宅というユートピア的なプロジェクトのための犠牲としての労働者のありようを端的にあらわしている。そのような彼らにとって、自由はもっぱら想像的なものにとどまっている。そして、つぎの引用箇所にあるように、そのような悲哀に満ちた眠りの時間が、彼らにとっての唯一の個人的な時間であるというところに、彼らの生活の悲惨さが集約されている。

... Разные сны представляются трудящемуся по ночам – одни выражают исполненную надежду, другие предчувствуют собственный гроб в глинистой могиле; но дневное время проживается одинаковым, сгорбленным способом – терпением тела, роющего землю, чтобы посадить в свежую пропасть вечный, каменный корень неразрушимого зодчества. (K.254/Ч.Т.2.337)

夜ごとに労働者にはさまざまな夢が現われる—あるものはかなえられた希望を表わし、あるものは粘土質の墓のなかにある自分自身の棺を予感している。しかし昼の時間は、同一の、曲げられた方法によって、つまり、新鮮な深淵に、破壊できない建築物の永遠の石の根を植えるために地面をほる身体の忍耐によって過ごされる。

無論、集団化に抵抗したために河に流されてゆくものたちも、全プロレタリアート住宅を建設させているのと同じ圧倒的な力にたいしてもっぱら受動的である。ただ、土台穴の労働者の受動性が、犠牲という意義を強く持った労働と関連付けられているのに対し、撲滅されていく富農たちの受動性は、黙示録における最後の審判と関連付けられている点が異なっている。また、つぎに引用する箇所にあるように、集団化に際して自分の財産を蕩

尽してしまおうとする富農の受動性は、自己を滅却してしまう労働者の受動性よりは弱いものにとどまっている。

Ликвидировав весь последний дышащий живой инвентарь, мужики стали есть говядину и всем домашним также наказывали ее кушать; говядину в то краткое время ели, как причастие, - есть никто не хотел, но надо было спрятать плоть родной убоины в свое тело и сберечь ее там от обобществления. (K.295/Ч.Т.2.370-371)

息をしている最後の財産を全て撲滅すると、農夫たちは牛肉を食べ始め、家のすべてのものもそれを食べるように命じた。聖餐のように、牛肉は短い時間で食べられた。一だれも食べたいものなどいなかったが、親しい、死んだ家畜の肉体を自分の身体に隠し、そこで集団化から保護してやらねばならなかった。

興味深いことに、ここで「聖餐 причастие」という語が登場していることで、富農たちもキリスト教的な共同体の比喩で表わされており、彼らにとっての集団化も受難の様相を帯びることになる。しかしながら、これからのべるように、受動性に関するエピソードを豊かにとり出せるのは、逆説的なことに、富農たちの受難にたずさわった、共産主義の側につく活動家たちの間においてである。つぎに検討するのは、土台穴の労働よりも受動性がより劇的に現われる条件としての、聴覚的な刺激である。

3-2. 『土台穴』における権力(2) : 聴覚的刺激

『土台穴』において、聴覚的刺激はある重要な役割を果たしている。それは、登場人物に対して、対話を許さない力として現われる。その場合、聴覚的刺激はひとつの強制なのだ。その最たる例が、村で富農撲滅が終わった後にコルホーズで行なわれる祝祭である。音楽は、富農撲滅の文字通り直後から始まる。傷病兵ジャーチェフが、筏で流される富農と別れを告げた次の行から、音楽が鳴り出すのだ。

- Эй паразиты, прощай! – закричал Жачев по реке.

- Прощай-ай! – отозвались уплывающие в море кулаки.

С оргдвора заиграла призывающая вперед музыка; ...

Активист выставил на крыльцо Оргдвора рупор радио, и оттуда звучал марш

великого похода, а весь колхоз вместе с окрестными пешими гостями радостно топтался на месте. (K.305/Ч.Т.2.379)

「おい、穀つぶし、さらば！」川沿いでジャーチェフが叫びだした。

「さあらあばあ！」海に去りゆく富農たちが答えた。

組織本部では前進を呼びかける音楽が鳴り出した。(中略)

活動家が組織本部のポーチにラジオの拡声器を持ち出していて、そこから大遠征の行進曲が響いていた。そして全コルホーズが近辺の徒歩でやってきた客とともに喜ばしげに足踏みをしていた。

彼らは、ラジオが故障した後は活動家の歌に合わせて、「Мы все чуем, только себя – нет(K.307)すべてを感じているが、自分たちだけは、感じていない」ほどの熱狂の中で踊りつづける。業を煮やしたジャーチェフがズボンの裾をつかんで倒すときまで、彼らは踊りつづける。

音に対する劇的な反応が描写されているのは、ここだけではない。富農撲滅に途中から参加する、「самого угнетенного батрака, который почти спокон века работал даром на имущих дворах, а теперь трудится молотобойцем в колхозной кузне(K.298/Ч.Т.2.372-373)もともと抑圧された小作人で、ほとんど大昔から無償で富裕な屋敷で働いていて、いまは槌工として鍛冶場で働いている」ものの、コルホーズ員とは見なされていない者として登場する人物は、農夫のエリセイに導かれたチークリンが鍛冶場に言ってみると、熊であることが判明するが、旺盛な意欲を持って働きつづける彼を止めるのは、つぎの引用箇所にあるように、組織本部の鐘だけしかない。

Раздался гул колокола, медведь мгновенно оставил без внимания свой труд – до того он ломал плетень на мелкие части, а теперь сразу выпрямился и надежно вздохнул: шабаш, дескать. (K.300/Ч.Т.2.374)

鐘のうなりが響いた、そして熊は、即座に配慮もなく自分の仕事を放り出した。それまで彼は編垣を解体して小さな部分にしていたが、いまやすぐに姿勢を正し安心して一息ついた。さあ安息日だとも言うかのように。

富農撲滅のあとの踊りにせよ、熊の休憩にせよ、共通しているのは、音に反応して劇的な変化が登場人物に生ずることであり、その場合その音は、「前進を呼びかける音楽」にせよ組織本部の鐘にせよ、遠くから響いてくる、大きな音であるということだ。『土台穴』における登場人物の、そのような受動性に関してプロスクリナは、中央からの指令などの権威付けられた言説がこの作品において「機械仕掛けの神」のように働くと指摘している⁵⁹。

つまり、いま検討してきたようなプラトーノフの登場人物の受動性は、権威に対する、とりわけ共産主義的なプロジェクトに対する受動性なのである。そのことにおいて、富農撲滅の進む農村のコルホーズのメンバーに見られる受動性は、この小説のもう一つの舞台である全プロレタリアート住宅の土台穴をほる労働者の受動性に対応しているのだ。

3-3. 『土台穴』における権力(3) : 言葉と悲劇

前節で引用したプロスクリナの指摘を参照すれば、『土台穴』の登場人物が服従する対象には、権威を代表する音声だけでなく、中央からの指令も含まれる。紙に書かれた指令を受け取るのは、活動家である。指令に対する彼の熱狂的な誠実さを良く表わす箇所を引用しよう。

Всю ночь сидел активист при непогашенной лампе, слушая, не скачет ли по темной дороге верховой из района, чтобы спустить директиву на село. Каждую новую директиву он читал с любопытством будущего наслаждения, точно подглядывал в страстные тайны взрослых, центральных людей. (К.275/Ч.Т.2.354-355)

夜通し活動家は消えることのないランプの下に座り、暗い道を地区からの騎乗者が、村に指令をおろしに疾駆してこないかと耳を澄ましていた。どの新しい指令も、彼は未来の満足への好奇心を持って読んでいた。まるで、成人した中央の人々の熱狂的な神秘を見ているようだった。

⁵⁹ Прокураина Е. Мистериальные аспекты поэтики повести «Котлован». // СФ4, 2000. С.595.

活動家のここでの熱狂的な姿勢を、言葉に対する従順さとして現われた受動性と呼ぶことができる。彼が言葉と関わりつつ能動的に、つまり作用を及ぼす存在としてふるまうとすれば、それは言葉を教えるという行為においてでしかない。活動家がある農家で文化革命の一環として行なうロシア語の授業において、彼は正書法における記号（硬音符）の挿入位置をきわめて厳格に教え込んでいる(K.288-289/Ч.Т.2.364-365)。このエピソードは、彼の、指令を執行する際の律儀さを示すとともに、生徒たちの側からすれば、活動家を通してソビエト社会における紋切り型が教え込まれ、意識を支配する強制的な力となる様子を描いているのだ。

そして、環境としての言語に対して人間がひたすら受動的でしかありえない状況は、『土台穴』において、活動家以外の登場人物に関しても印象的なエピソードを形づくる。言葉は、『土台穴』にあって、権力と直結している。書物から「формулировки, лозунги, стихи, заветы, всякие слова мудрости, тезисы различных актов, резолюции, строфы песен(K.271/Ч.Т.2.351)公式やスローガンや詩や遺訓や、ありとあらゆる金言、様々な布告や決議のテーゼ、歌の歌詞」などを暗記して人々から食料をせしめるばかりか、協同組合の主任の職まで得てしまう、かつては身体の弱い土台穴の労働者だったコズロフにとって、言語的環境をすすんで受容することはとりもなおさず彼の社会的地位の上昇を意味している。また、いささか醜悪なそのような挿話だけが、この作品における言葉の強力さを示すのではない。全プロレタリアート住宅を設計する知性を持つが、情熱を欠いたプルシエフスキーに愛を捧げようとする少女が、彼に望むのは、「научить ее этим словам, этому умению чувствовать в голове весь свет, чтобы помочь ему светиться(K.316/Ч.Т.2.388)彼女にこれらの言葉、頭ですべての世界を感じるその能力を、世界が輝くのを助けるために、教えること」なのだ。

言葉は、登場人物を熱狂させ助けるだけでなく、彼らを裏切ることもある。ここにおいて、言語との関係における受動性が、受難の主題へと関連付けられるのだ。富農撲滅のあとに活動家のもとに届いた指令は、彼を「забежал в левацкое болото правого оппортунизма(K.318/Ч.Т.2.389)右派日和見主義の左翼偏向的な沈滞ムードへと駆け込んだ」として非難するものだった。ここには、1920年代の政治的な闘争において、左翼反対派や右翼反対派などの用語がたんに罵倒の言葉と化した状況が、活動家が右派であり左派であるという言い回しにおいて風刺の対象になっている。その挙句、「Почувствовав мысль и одиночество, не желая безответно тратить средство на государство и будущее поколение,

активист снял с Насти свой пиджак(К.319/Ч.Т.2.390)思考と孤独を感じて、国家と未来の世代のために物を消耗することを望まず、活動家はナースチャから自分のジャケットを取った」ことで、指令の内容を傷病兵ジャーチェフから知ったチークリンに致命的な殴打を見舞われる。その一方で、チークリンに加えてヴォーシェフにも殴られたあとの活動家を憐れむものはないが、彼の死を喜ぶものもない。なぜなら、「говорил активист всегда точно и правильно, вполне по завету(К.322/Ч.Т.2.393)活動家はいつも正しく正確に、完全に遺訓どおりに物事を言ってきた」からだ。

あくまでも、指令に従って行動した人物であったにもかかわらず、そのあとで指令の持つ力で社会的にかつ身体的に抹殺される活動家が、自分自身では責任を取りえない罪を負って死亡する悲劇的な形象であると判断することは、ひとまず適当な判断であると思われる。ここで、先行研究を踏まえつつより詳細に検討してみよう。カサートキナとパストゥシェンコは、活動家が、虚偽によって人々を導くアンチキリスト的な登場人物であると指摘している。カサートキナは、活動家が政治的な大審問官としての特徴を備えていると指摘している⁶⁰。以下に主張する理由から、活動家をそのように見なすのは間違っている。実は、ヴォーシェフが活動家を殴ることは、重大な意味を持っているが、それに関しては次章で検討する。

ここで、アンチキリスト、あるいは反キリストに関して『新約聖書』を参照しよう。「ヨハネの手紙」をみると、「偽り者とは、イエスがメシアであることを否定するものでなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めないもの、これこそ反キリストです⁶¹」という反キリストの定義を見出せる。そして、「だれであろうと、キリストの教えを越えて、これにとどまらない者は、神に結ばれていません。その教えにとどまっている人にこそ、御父も御子もおられます⁶²」とされる。

『カラマーゾフの兄弟』の大審問官は、彼がキリストだと信じる人物を、不要な存在とし、彼を処刑する、と脅す点において、完全に「ヨハネの手紙」における反キリストの定義に当てはまる。しかし、指令に対して従順な活動家には、大審問官が持っているような、自由を奪う代わりに民の生活を保障するような構想力はない。加えて、活動家が自分の作業に対して不満を漏らす際の「Ущерб приносишь Союзу, пассивный дьявол, мог бы весь

⁶⁰ Касаткина Е. «Прекращение вечности времени», или Страшный Суд в котловане (Апокалиптическая тема в повести «Котлован»). // СФ2, 1995. С. 184.

⁶¹ 「ヨハネの手紙一」2章22節

⁶² 「ヨハネの手紙二」9節

район стравить на коллективизацию, а ты в одном колхозе горюешь(К.312/Ч.Т.2.384)連邦に害を与えているぞ、やる気のない悪魔め、全地区を集団化へと煽り立てることもできたのに、おまえといえばコルホーズにばかりいて嘆いている」という言葉は、悪魔の側につくと宣言する大審問官を連想させるものの、活動家が使ったやる気のない悪魔 *пассивный дьявол* という言い回しには、大審問官におけるような確信犯的な意図が欠けている。この言い回しは、むしろ政治的な文脈を踏まえて理解されるべきものである。大衆の労働における能動性を高めるための、ブハーリンら右翼反対派に対する攻撃として『偉大な転換の年』で唱えられた「自己批判」を活動家が、ここで自分自身を対象にして行なっているからだ。ここで、発展の遅いテンポと関連して、この「やる気のない悪魔」という言い回しが用いられていることは、悪魔の形象において右派があらわされているという解釈を許すものである。むしろ、活動家は、大審問官が救おうとする、自由に耐えることができない人々の一人と見なすのが正当である。

活動家は、アンチキリストではなく、むしろ、ソフォクレスの作品のオイディプス王と同じ意味で悲劇的な存在なのだ。オイディプスは父を殺害するが、それは故意の犯罪でなかった。というのは、同様に、「右派日和見主義」や「左翼偏向」という言葉は、党の教えに、つまり党の路線にそぐわない者として活動家を非難するものだが、彼はそれを故意にやったのではないからだ⁶³。

以上のような検討を踏まえれば、活動家は、中央からの指令として具現化した不可抗力に受動的でしかありえず、それに敗北して死ぬという意味において、悲劇的な登場人物だといえる。そして、全プロレタリアート住宅のための土台穴が際限なく人間を犠牲にしてゆく不条理さ、そして富農撲滅という黙示録的な状況とならぶ、『土台穴』における悲劇性の重要な一要素として、この、言葉と人間の間を挙げるのが可能なのだ。というのは、この作品における最も痛ましい悲劇的形象として、タイル工場でチークリンが拾ってくる孤児のナースチャを挙げるができるが、彼女も活動家に劣らず、革命をめぐる言葉に対して従順であるからだ。

⁶³ にもかかわらず、活動家が「遺訓」としての指令に従っていることは彼を免罪する根拠にはならない、と主張するものもある。たとえばパストゥシェンコは「世界のこの創造された (творимый) 終末において活動家はアンチキリストに似ている。かれが個性も名前ももたず『遺訓どおりに』話すのは偶然ではない。この遺訓はキリスト教の伝説によると、キリストのパロディーである、悪魔の僕を作るものだ」(Пастушенко Ю. Поэтика смерти в повести «Котлован». // СФ2, 1995. С. 195.) といっている。しかし、パストゥシェンコはその伝説を具体的に名指していないので、本論文では『新約聖書』における反キリストのみを参照した。

ナースチャの悲劇性における、言葉に対する従順さとして現われた受動性を検討する前にひとまずは、ナースチャにおいて、『土台穴』の悲劇性は集約された形であられることを確認しておこう。積極的に革命に関与する労働者のサフローフは、彼女を「*наш будущий радостный предмет*(K.272/Ч.Т.2.352)われわれの未来の喜ばしい対象」と呼ぶが、そのナースチャが死ぬことが、この作品における、全プロレタリアート住宅という未来のためのプロジェクトが破綻することの象徴であることは、明白であるし、過去の研究でも指摘されている。たとえば、ギンテールは、『土台穴』においては共同住宅を建設した結果として得られたのはユートピアとは正反対の死者の墓である、と指摘している⁶⁴。

さらに、ナースチャがタイル工場の娘から生まれた子供であることを考慮すれば、彼女の死は、この工場がある町における階級闘争の帰結でもある。その意味では、彼女の死は旧体制の撲滅の達成の一部という性格も帯びている。このように、『土台穴』におけるナースチャの死は両義的なのだ。そして、ナースチャの死に加えられるもう一つの意味が、言葉に対する受動性という観点から明示されるのである。

母親が死んだあとタイル工場から土台穴に移ってきたナースチャは、活動家が教育するまでもなく自発的に、共産主義の語彙を使用して語り始める。土台穴で働く労働者のなかでもっとも共産主義に積極的に関与しているサフローフに、だれが一番偉い人物なのかと尋ねられ、「Главный – Сталин, а второй – Буденный. Когда их не было, а жили одни буржуи, то я и не рожалась, потому что не хотела. А как стал Сталин, так и я стала! (K.264/Ч.Т.2.346)一番目はスターリン、二番目はブジョンヌイ。彼らがいなくて、ブルジョアだけが生きていたとき、私は生まれてもいなかった、だって生まれたくなかったんだもん。スターリンが現れて、私も現れたの」と答える場面において、そして、土台穴にいる技師のプルシェフスキーから組織本部にいる土方のチークリンに宛てられた手紙に添付されたナースチャの手紙の文面（「«Ликвидируй кулака как класс. Да здравствует Сталин, Козлов и Сафронов. Дядя Чиклин, Сталин только на одну каплю хуже Ленина, а Буденный на две. Привет бедному колхозу, а кулакам нет» (K.284/Ч.Т.2.360)階級としての富農を撲滅して。スターリン、コズロフそしてサフローフ万歳。チークリンおじさん、スターリンはレーニンより一滴ぶんどけしかわるくない、ブジョンヌイは二滴。富農じゃなくて、貧しいコルホーズによろしく」)において、活動家において見られたような言葉に対する従順さ、受動性は絶頂に達する。

⁶⁴ Гюнтер Х. Котлован и Вавилонская башня. // СФ2, 1995. С. 147.

したがって、『土台穴』の結末において相次いで死亡する活動家とナースチャは、スターリンが指導者となった時代の言葉をひたすら受け入れるという受動性において共通しているといつてよい。しかし、この共通性には留保をつける必要があるかもしれない。というのは、指令において非難されたことが直接のきっかけとなって死亡した活動家の場合と異なり、発熱して死亡したナースチャと言葉の抗いがたい力との関係は明示的ではないからだ。

ナースチャの死と言葉の関係を考える上で、ここで意義深く思われるのは、サフローノフがナースチャを慕い、彼女に寝床を敷いてもらいそれを暖めてもらうことや(K.272/Ч.Т.2.352)、ナースチャのスターリン賛美がサフローノフとの会話において出現し、また上の手紙においてコズローフとサフローノフが称えられていることである。なぜなら、この二人はともに、アルテリによって派遣され土台穴の近くの村に孤立した貧農がいないか探している途中で殺害されてしまうからだ。

コズローフがスローガンなどで人々を威嚇して食料や職にありつく、言葉に依存した存在であることはすでに述べたとおりだが、作品を検討することで判明するのは、サフローノフもまた、プロスクリナが先に引用した箇所において指摘しているような、言葉として現われた「中央の人々」の権威に従順な、その作用に対して受動的な人間であるということだ。サフローノフは、土台穴の労働者が「для заслушанья достижений и директив(K.255/Ч.Т.2.338)成果と指令を聴取するため」にラジオを設置することを提案する。そして、労働地区委員会の議長パーシキンが実際にラジオを設置した後、それが故障したとき、ラジオの代りに話し始めるのもまたサフローノフなのだ(K.260/Ч.Т.2.343)。さらに、決定的なのは、コズローフ Козлов は、山羊を意味する козел と共通の語根を持っていることである。ハリトノフは、山羊は隠語で性的倒錯者を意味すると指摘することで、夜に手淫にふけるために日中労働できないというコズローフの性格を根拠付けているが⁶⁵、本論文では、козел отпущения が「贖罪の山羊」を意味することに注目したい。コズローフ、そして言葉との悲劇的な関係をもった者たちによって贖われた罪とは何かという問いを、この言い回しを手掛かりに問うことが可能になるからである。

キリスト教における原罪は、神との調和的な関係が破綻した結果として生ずるとされるが、『土台穴』においてそのような調和の破綻を、ソヴィエト政権と活動家の間の関係につ

⁶⁵ Харитонов А. Система имен персонажей в поэтике повести «Котлован». // СФ2, 1995. С.157—158.

いて指摘できる。同様の罪を、コズローフやサフローノフにおいても指摘できるだろう。すでに見たとおり、社会主義的工業化の進む時期のソヴィエト政権において相次いだ政策の頻繁な転換という条件のもとでは、すなわち具体的には『偉大な転換の年』において急激な集団化が唱えられるかと思えば『成功による眩惑』においてその政策の誤りが指摘され、さらにその責任が末端の活動家に帰せられる状況では、人民が政権との調和的な関係を実現することは不可能に近い。ゆえに活動家にとって罪は不可避的だった。しかし、そのような罪を犯しうるのはコズローフたちや活動家だけではなく、この罪は農業集団化を推進しようとするものたち全員において普遍的なものだったと考えられる。したがって、コズローフらの死を、そうした普遍的な罪のための犠牲、つまり受難と見なすことは、これまでの分析からみれば不当なものではないと思われる。そして、ここで論じた意味での人民の〈罪〉が、ナースチャにおいてもっとも悲劇的に形象化されていると考えることは、可能だと思われる。

すると、チークリンに撲殺される無名の農夫や、同様にその名が明かされないナースチャの母を除けば、『土台穴』において死亡する主要な登場人物である、活動家とナースチャ、およびコズローフとサフローノフたち四人は、全員が、党によって権威付けられた言葉を受け入れるその姿勢において際立っていたことが判明する。言葉に対する彼らの姿勢と、彼らが辿る運命の正確な符合は、彼らの死を、言葉との関係において生じた悲劇として位置付けることを可能にする。彼らは、革命に活発に参加するという意味では、活動的、つまり能動的であるが、同時に、党の路線に対して従順であるという意味では、受動的なのである。

4. 『土台穴』における「受動性」と「能動性」という語の用例

ここまでは『土台穴』における受動性を、この作品のエピソードや登場人物の性格に見出して分析してきた。そのなかで明らかになったのは、この作品における受動性が、たとえば土台穴の労働に従事すること、あるいは党の路線に対して従順であることとして現われ、それが登場人物に受難をもたらすということだった。この観点から興味深いのは、この作品のテキストにおいても、受動性や能動性という語がかなり頻繁に用いられていることである。そして、その用例を検討することで分かるのは、登場人物の受動性や能動性についての思考自体が政治的な言説に浸されていることである。スターリンは、「по линии борьбы с бюрократизмом, сковывающим трудовую инициативу и трудовую активность масс – через самокритику 大衆の労働における創意と労働における能動性を拘束する官僚主義との闘争の路線にそって、自己批判を通じて（太字は原文のまま）」労働の生産性を高めることを『偉大な転換の年』において唱えた⁶⁶。ここでの能動性 *активность* とは、社会主義の建設を進める情熱のことを指している。本作品における *активность*、およびその対義語としての *пассивность* もまた、生産性をあげるために前者が是とされた文脈に属している。登場人物たちは能動性を想像できるが、それは同時代の言説に沿ってのことなのであり、その意味では徹頭徹尾、受動的なのである。ここでは、『土台穴』における形容詞 *пассивный*（受動的）およびその対義語の形容詞 *активный*（能動的）のおもな用例を検討することで、この作品においてこれらの語がどのような文脈に置かれ、そのような文脈は、他の文脈における *активность* および *пассивность* とどのような関係にあるかが考察される。

形容詞 *пассивный* およびこれに関連する副詞は、第一に、革命に対する積極的な関与が欠如した様子をあらわすのに使用されている。そのような例は、土台穴に持ち込まれたラジオが故障したとき「*пассивное молчание* (K.260/Ч.Т.2.343) 受動的な沈黙」に気づいたサフローノフがラジオに代って話しはじめる本論文でもすでに取り上げた場面に現れている。そしてさらに、サフローノフが、とある協同組合を訪れて、その組織が英国由来のものでありソビエト的になっていないと難癖をつけながら「Так, значит, опять: просил он, *пассивный*, не счастья у неба, а хлеба насущного, черного хлеба(K.271/Ч.Т.2.352) ということは、またか。受動的な彼が乞うているのは天上の幸福ではなくて、日々の糧、それも黒

⁶⁶ Сталин И. Год великого перелома к XII годовщине октября. М., 1949, С.4.

パンを手に入れることなんだ」と言う場面、そして、活動家が自分の達成に不満を洩らして「**пассивный дьявол**(K.312/Ч.Т.2.384)やる気のない悪魔め」と毒づく場面で用いられている（ここでの形容詞の強調は引用者による）。

それに対し、形容詞 **пассивный** の第二の用法を示す次の二つの用例においては、本論文における受動性に近い意味において、つまり単なる無為ではなく権力への従順さという意味においてこの形容詞が使用されている。それは、労働者のチークリンと技師のプルシェフスキーが、ナースチャの母であると推測される共通の女の知り合いを懐かしんでいるのを怠慢なこととして見咎めたサフローノフが「**я вас попрошу стать попассивнее, а то время производству настает**(K.252/Ч.Т.2.336)もうちょっと受動的になるよう頼むよ、労働の時間になるよ」と言う場面と、富農撲滅後にコルホーズで始まる祝祭的な状態で「**пассивные мужики кричали возгласы довольства**(K.305/Ч.Т.2.379-380)受動的な農夫たちが満足の叫びをあげた」場面に登場している。

次に形容詞 **активный** およびそれに関連する副詞や名詞を検討することで明らかになるのは、これらの語が表わす、活動的なありさまや積極的な様子の多くが、党の路線に従った活動や、党の指令を実行する積極性に関わっていることである。たとえば、サフローノフが、未熟な新入りの労働者に関して「**Мы ихнюю отсталость сразу в активность вышибем**(K.242/Ч.Т.2.326)我々は彼らの後進性をすぐに積極性に追い込んでやる」と決意する場面、サフローノフがラジオの設置を提案して「**сделал активно мыслящее лицо**(K.256/Ч.Т.2.339)活動的に考えるような顔を作り」去っていく場面、サフローノフが、自分が「**знали и уважали как активную общественную силу**(K.271/Ч.Т.2.350-351)活動的で社会的な力として知られ尊重される」組織を巡り歩いていること、死亡したサフローノフとコズローフを前にしてチークリンが「**Буду день и ночь активным, всю организационность на заметку возьму**(K.277/Ч.Т.2.356)昼も夜も活動的になって、すべての組織性をマークする」と決意する場面がそれにあたる。ラジオを聞きつつ、サフローノフが自分もラジオに対して返答したいと考えることは、これらの例とは若干こととなった自発性を帯びているが、しかし彼が語りたいのが「**об его чувстве активности, готовности на стрижку лошадей и о счастье**(K.260/Ч.Т.2.342)活動性、馬を刈り込む準備ができていること、そして幸福について」であり、中央からの指令への従順さに関わるものであるから、これも例外とはなりえない。また、パーシキンの家にある「**различные жидкости и баночки для укрепления здоровья и развития активности**(K.244/Ч.Т.2.328)健康増進、活動性の発展のためのさまざまな液体や

小瓶」という用例において、パーシキンが、他の登場人物とは異なり、夫婦生活を革命と同程度に重視する傾向があるゆえに一定の留保はつけねばならないが、基本的には上にあげた例と同じ意味において積極性、つまり能動性が使用されているとみてよいだろう。

以上、形容詞 *пассивный* と *активный*、およびそれと共通の語根をもつ語の用例を簡単にみてきたが、その結果判明するのは、この二つの語が、対義語としての対立をほぼ失っていることである。なぜなら、この作品における活動性あるいは能動性 *активность* は、上の分析における、この作品の第二の用法における消極性あるいは受動性 *пассивность* に等しいからだ。そして第一の、不活発さとしての受動性 *пассивность* は、土台穴において体力を使い果たす労働者たちにおいて支配的な状態であり、第二の、権力に対する従順さとしての受動性 *пассивность* は、登場人物が党の路線に従いつつ革命に関与しようとするとき、支配的になる状態である。

かくして、『土台穴』においては、受動性が支配的な要素として作品のほとんどすべての局面に遍在していることが判明した。そして、これまで語られてきたような受動性は、全プロレタリアート住宅のための土台穴の労働者の消耗にせよ、富農撲滅を支持する活動家・ナースチャ・コズローフ・サフローノフの死にせよ、一様に登場人物たちに犠牲となることを迫るものであった。したがって、『土台穴』においては受動性と受難が、分かちがたく結合して現われていることになる。これこそ、悲劇的な作品としての『土台穴』における、支配的なパトス（受難・受動性）である。

そして、『土台穴』のこの悲劇が住宅建設と集団化として形象化された社会主義建設において起こっていることを考慮すれば、この作品における能動性 *активность* と受動性 *пассивность* は、『偉大な転換の年』において、自己批判によって高められることが目指された大衆の「労働における能動性 *трудовая активность*」が唱えられた文脈と、ほぼ等しいと言えるだろう。

5. ヴォーシェフの能動性

プラトーフにおける放浪者が、基本的に受動的であるということを踏まえたうえでこの作品で際立っているのは、ヴォーシェフが、消極的な人物から積極的な人物へと変化していく契機が描かれていることである。彼は、作品のクライマックスにおいて、放浪者からコルホーズの指導者へと変化するのである。彼がどのような人物として描かれているか、引用によって追ってみよう。

В день тридцатилетия личной жизни Воцеву дали расчет с небольшого механического завода, где он добывал средства для своего существования. В увольнительном документе ему написали, что он устраняется с производства вследствие роста слабосильности в нем и задумчивости среди общего темпа труда.
(K.225/Ч.Т.2.308)

個人生活三十周年の日にヴォーシェフは、自分の生存の手段を得ていた小さな機械工場を解雇された。解雇通知の書類に書かれていたのは、労働が、全体としてテンポを上げているのに、ヴォーシェフはますます虚弱になり、ますます考え事にふけるようになって生産から身を引いているのだということだった。

という、この作品の冒頭部分はずでに、彼の性格を要約している。ここに書かれていることのうち、さしあたり明らかなのは、消極性としての受動性である。この作品において、無職となった彼は、全プロレタリアート住宅にたどり着くまで、漂泊を続ける。彼が沈黙考するのは、真理を求めているからで、つぎの引用箇所にあるように、真理の欠落は彼にあって身体的な衰弱に直結している。

Но вскоре он почувствовал сомнение в своей жизни и слабость тела без истины, - он не мог долго [дальше трудиться и] ступить по дороге, не зная точного устройства всего мира и того, куда надо стремиться. Истомившись скудным размышлением, Воцев [Воцев, истомившись размышлением,] склонился и лег в пыльные, проезжие травы; было жарко, дул дневной ветер, [...] и где-то кричали петухи на деревне – все предавалось безответному существованию, один Воцев отделился и молчал.
(K.227/Ч.Т.2.311)

しかし彼はまもなく自分の人生への疑いと、真理を欠いた身体の衰弱を感じた。全世界の正確な構造と、どこを目指せばよいかを知らなかったのも、彼は長い間[それ以上労働し]歩いていくことができなかった。貧しい考察に疲れ果て、ヴォーシェフは身をかがめるとほこりだらけの道端の草に横たわった。暑かった。昼間の風が吹き、どこか村で雄鶏が鳴いていた。全てが、応答の無い存在に身をゆだねていて、ひとりヴォーシェフだけが分離し沈黙していた。

真理を求めて得られないヴォーシェフは、この引用箇所の後半部分がすでに示しているのだが、周囲の事物という環境からの刺激を、感覚として受容しつづける。そのような彼の、自然のなかで呆然とする態度は、この小説のほかの登場人物には見られないものである。これが、彼の受動性のもう一つの側面である。彼は、物思いに耽るか、ひたすら周囲の事物を見つづける存在として行動しつづける。

漂泊者としてのヴォーシェフは、全プロレタリアート住宅というユートピア的な事業の進む土台穴にたどり着き、土方として働くようになる。「[Ты же не работаешь, ты не переживаешь вещества существования] (Ч.Т.2.315)[おまえは働いていない、おまえは存在の物質を体験していないんだよ]」と労働者に言われた彼は彼らと食事をともにし、「[- Я теперь тоже хочу работать над веществом существования] (Ч.Т.2.316) [私もいまとなっては存在の物質に従事したい]」と言って働き始める。そこで彼が目にするのは、すでに詳述した、ユートピアの実現のために犠牲になる労働者たちである。彼らを見て、ヴォーシェフは、「Дом человек построит, а сам расстроится(К.230/Ч.Т.2.313)家を人間は建てるだろうが、当の人間は崩壊するだろう」と思う。そして、ヴォーシェフに「Вы уж, наверное, все знаете? あなた方はもう、たぶん、すべて知っているのですね」と尋ねられ、「Мы же всем организациям существование даем! (К.232/Ч.Т.2.315)おれたちは全組織に存在を与えている」と答えた労働者たちはそのことを自覚しているのかもしれない。彼は、存在の意味を問いつつ、確信の持てないまま労働を始めるものの、次の引用箇所にあるように、周囲の存在を注視してしまう。

Вощеву дали лопату, он сжал ее руками, точно хотел добыть истину из земного праха; обездоленный, Вощев согласен был и не иметь смысла существования, но желал хотя бы наблюдать его в веществе тела другого, ближнего человека, - и [,] чтобы находиться

вблизи того человека, мог пожертвовать на труд все свое слабое тело, истомленное мыслью и бессмысленностью. (K.232/Ч.Т.2.317)

ヴォーシェフはシャベルを与えられ、この世の塵から真理を得ようとするかのように、彼は握り締めた。困窮していたから、ヴォーシェフは存在の意味を持たないことに同意していたが、せめて近くにいる他人の身体という物質のなかにそれを観察したいと望んでいた。そしてその人間の近くにいるためなら、思考と無意味さに疲れ果てた自分の虚弱な身体を労働のためにすべて犠牲にできた。

周りを注視することで真理への憧憬を保ちつつも、ここでのヴォーシェフが、前章で述べたような受動性に支配されつつあることは確かだろう。まもなくヴォーシェフは、彼ら労働者を見て、「Вошев осмотрел этих людей [поглядел на людей] и решил кое-как жить, раз они терпят и живут: он вместе с ними произошел и умрет в свое время неразлучно с людьми. (K.234/Ч.Т.2.319)ヴォーシェフはこれらの人々を子細に見て[人々をしばらくの間注視して]彼らが耐えて生きているからには何とかして生きようと決めた。彼は彼らと同じ生まれであり、しかるべきときに彼らと離れることなく死ぬのだ」と決心するようになる。

しかしながら、ヴォーシェフと他の労働者たちをあくまで分かちつづけるのは、自然のなかに分けいり、その存在に圧倒されてしまうという資質である。その資質によって、他の労働者が蒙っている作用とは違う、つまり、労働の強制や、中央からの指令として現われた言語的環境からくる作用とは異なった作用を、彼は蒙ることとなっている。そのような彼の資質を、このうえなく明確に描ききっているのが、土台穴で発掘された、農夫が地中に保管していた棺を取り戻して引きずっていった痕跡をたどってヴォーシェフが歩いていく光景を描写した、本論文の第一章 4-3 の引用箇所である。

このような、不透明さの支配する、展望の欠如した状態は、ほかの登場人物が眺める、あるいは夢見る、この作品におけるユートピア的な形象とは異質なものである。たとえば、プルシェフスキーが遠くに眺める「белые спокойные здания(K.266/Ч.Т.2.348)白い穏やかな建物」の形象、あるいはサフローノフが思い描く、「счастье будущего, которое представлял в виде синего лета, освещенного неподвижным солнцем(K.247/Ч.Т.2.331)不動の太陽に照らされた暗青色の夏という形で理解していた未来の幸福」のように、遠距離にあったり、不動であったりするイメージとは異なり、ここでヴォーシェフが見出してしまっているのは、

至近距離にあり、運動する物なのだ。

この章で見出そうとするもう一つの受動性と能動性は、労働するヴォーシェフにおいて、前章で見出された受動性と能動性と共存している。もう一つの受動性と能動性とは、周囲の現実を受け入れ受動的になりつつ、同時に真実を求め注視するという行為のことであり、注視するという行為が、ソヴィエト政権からの強制に基づかないという点において、ここに『土台穴』におけるもう一つの能動性の徴候が現われているのである。

そして、この可能性としての能動性が、一つの実践として、ヴォーシェフのある行為として現われる。それは、彼の周囲のさまざまな物を収集することである。工場で解雇されて徘徊していた時点で既に「мешок, куда собирал для памяти и отмщения всякую безвестность(К.230/Ч.Т.2.314)記憶と復讐のためにすべての無名な物をあつめた袋」を携行していたヴォーシェフは、土台穴での労働を始めてからも、休日に自発的に行なう行為において、その可能性に近づく努力をする。注視という行為においてまだ支配的だった、周囲の事物に対する受動性が、収集という行為の能動性に、つぎの引用箇所につながっているのである。

Вощев, как и раньше, не чувствовал истины жизни, но смирился от истощения тяжелым грунтом и только собирал в выходные дни всякую несчастную мелочь природы как документы беспланового создания мира, как факты меланхолии любого живущего дыхания. (К.255/Ч.Т.2.338)

ヴォーシェフは、以前と同じように、人生の真理を感じるができなかったが、重たい土を扱って疲弊したためおとなしくしていた。ただ休日になると、すべての不幸な自然のこまごまとしたものを、無計画な世界の創造の記録として、あらゆる生きた呼吸の憂鬱という事実として、集めていた。

そのようにして、物を収集することで、ヴォーシェフはあくまでも真実を探しつづけている。これが、最も低いレベルにおいて現われた、『土台穴』における、もう一つの能動性である。つぎの引用箇所においてヴォーシェフは真実が見つからないことに絶望を感じているが、同時に、まさにこの箇所において、収集という行為に込められた彼の意図が語られているのである。そしてまた、真理を物質のうちに見出そうとするヴォーシェフにと

って、真理は何らかの認識であるというより、一つの具体的な物として捉えられていることを、この箇所は示唆している。

все равно истины нет на свете или, быть может, она и была в каком-нибудь растении или в героической твари, но шел дорожный нищий и съел то растение или растоптал гнетущуюся низом тварь, а сам умер затем в осеннем овраге, и тело его выдул ветер в ничто. (K.296/Ч.Т.2.371)

いずれにせよ、この世界に真理はない。もしくは、おそらく真実は何かの植物か、ヒロイックな生きものたちのなかにあったが、旅の途中の乞食があるいていて、その植物を食べてしまった、あるいは低いところで苦しんでいるその生きものたちを踏みつぶして、自分自身はその後、秋の窪地で死んでしまい、風が彼の身体を無へと吹き飛ばしたのだろう。

このように、具体的な物という、ヴォーシェフにとっての真理のあり方が、ひたすら収集しつづけるという彼の行動様式を裏付けている。そして、ヴォーシェフにおいて、収集するという行為は、死者に関する事実に意味を与える試みでもあることが判明する。この、収集するという行為は、すでに言及した通り「記憶と復讐」という目的を持っているが、それは、死者の痕跡を残す事物を集め、それらの事物の総体として意味を残そうとすることだからだ。次の箇所はそのことを示しているが、収集という行為はここにおいて、明確に革命的な実践としての性格を帯びている。

Он собрал по деревне все нищие, отвергнутые предметы, всю мелочь безвестности и всякое беспамятство – для социалистического отмщения. Эта истершаяся терпеливая ветхость некогда касалась батрацкой, кровной плоти, в этих вещах запечатлена навеки тягость согбенной жизни, истраченной без сознательного смысла и погибшей без славы где-нибудь под соломенной рожью земли. Вошев, не полностью соображая, со скупостью скопил в мешок вещественные остатки потерянных людей, живших, подобно ему, без истины и которые скончались ранее победного конца. Сейчас он предъявлял тех ликвидированных тружеников к лицу власти и будущего, чтобы посредством

организации вечного смысла людей добиться отмщения – за тех, кто тихо лежит в
земной глубине. (K.310/Ч.Т.2.382)

彼は村を巡ってすべての貧しい、はねつけられた物体、さまざまな名前もわからない小物やすべての忘却されたものを集めた。それは社会主義的復讐のためだった。この摩滅した我慢強い老朽した品々はかつて貧農の、切実な肉体に触れていたものであり、これらの物に永遠に刻まれているのは、生の意味も自覚できないまま徒に生き、乾いたライ麦畑のどこかでたれ死にするような歪んだ人生の重苦しきである。ヴォーシェフは、完全には分かっていなかったものの、控えめに、彼と同じように真実な生き勝利には終らずに死んでしまった、失われた人々の物質的な痕跡を袋に貯えていた。いま彼は、一掃された働き者たちを、権力と未来の鼻先に突きつけていた。人が生きる永遠の意味を組織することで復讐しようとしていたのである。それは、大地の奥深くに静かに横たわる者たちのためだった。

しかし、チークリンは、そうした事物を眺めつつ「те же безымянные люди, от которых остались только лапти и оловянные серьги, не должны вечно тосковать в земле, но и подняться они не могут(K.311/Ч.Т.2.383)その名も無き人々、彼らからはただ、わらじと錫製のイヤリングしか残っていないが、彼らは大地の中で永遠に物思いに沈んでいてはならない、けれども、上ってくることも彼らにはできないのだ」と考える。しかしながらヴォーシェフはこの収集を続け、ついにこの作品において、抑圧されたものたちのための「社会主義的復讐」という革命的実践のためにヴォーシェフの収集するものがおさまる範囲が、彼の携行する袋を越えて拡大する局面が現われる。彼の収集品の中に、鍛冶工の熊が加わるのである。そのとき、収集されたものの総体は、抑圧された存在の共同体に変化してしまう。

Войдя в Оргдом, молотобоец обнюхал лежачего активиста и сел равнодушно в углу.

- Взял его в свидетели, что истины нет, - произнес Воцев. – Он ведь только работать может, а как отдохнет, задумается, так скучать начинает. Пусть существует теперь как предмет – на вечную память социализму, я всех угощу!

(.....)

Наклонившись, Воцев стал собирать вынутые Настей ветхие вещи, необходимые для

будущего отмщения, в свой мешок. (.....)

- Воцев, а медведя ты тоже в утильсырье понесешь? – озаботилась Настя.

- А то куда же? Я прах и то берегу, а тут ведь бедное существо! (K.321-322/Ч.Т.2.392)

組織本部に入って、樋工は横たわる活動家の臭いをかいで無関心な様子ですみに座った。

「真実はないということの証人として、彼を連れてきたのです」とヴォーシェフはいった。「だって彼は働くことしかできず、休憩して考え込むと、退屈し始めるのですから。物として存在すればいい。社会主義の永遠の記憶のために、私はみんなをもてなしてあげます！」

(.....)

かがみこんで、ヴォーシェフはナースチャが取り出した、未来の復讐のために必要な古ぼけた品々を、自分の袋に集めた。(.....)

「ヴォーシェフ、熊も廃品回収で持っていっちゃうの？」とナースチャが気遣った。

「でなかったらどこに持っていくんです。ぼくは塵もそれも大事にしているけど、ここじゃまったく惨めな生きものですからね」

すでに死んだ者たちの持ち物を集めるだけではなく、熊をも集め、皆をもてなそうとするヴォーシェフは、ここで人間をも含めた存在を、「人々の永遠の意味を組織するということ」のために集結させるに至る。結局、真理は物質の中にも見出されなかったが、作品の結末に近いこの部分にあって、ヴォーシェフが、作品の冒頭でひたすら沈黙考し周囲の刺激を受け入れるばかりだったのとは対照的に、決然と行動していることは注目に値する。作品の前半においてすでに「тосковал о будущем, когда все станет общеизвестным и помещенным в скупое чувство счастья. (K.255/Ч.Т.2.338)すべてが万人に周知のものとなり、控えめな幸福の感覚に住まわされている未来に思い焦がれる」ときを待ちつつ夜を過ごすばかりだった彼は、ここではコルホーズ員に対してほとんど指導者的にふるまっている。つまり、周囲の存在を注視するというレベルで潜在的に現われていた能動性が、様々なものを集めることの能動性をへて、革命的な実践における明らかな能動性へと発展している。

ヴォーシェフにおいてこのような変化が起こった時点は、作品中に明確に書き込まれており、それは、上の引用箇所においてすでに横たわって死亡していた、活動家の死とともに起こる。指令によって叱責された活動家を撲殺したのはチークリンだが、活動家の死体を、ヴォーシェフは殴る。その場面が、つぎの引用箇所において描写されている。

Вощев снова прилег к телу активиста, некогда действовавшему с таким хищным значением, что вся всемирная истина, весь смысл жизни помещались только в нем и более нигде, а уж Вощеву ничего не досталось, кроме мученья ума, кроме бессознательности в несущемся потоке существования и покорности слепого элемента.

- Ах ты, гад! – прошептал Вощев над этим безмолвным туловищем. – Так вот отчего я смысла не знал! Ты, должно быть, не меня, а весь класс испил, сухая душа, а мы бродим, как тихая гуща, и не знаем ничего!

И Вощев ударил Активиста в лоб – для прочности его гибели и для собственного сознательного счастья.

Почувствовав полный ум, хотя не умея еще произнести или выдвинуть в действие его первоначальную силу, Вощев встал на ноги и сказал колхозу:

- Теперь я буду за вас горевать!

- Просим!! – Единогласно выразился колхоз. (К.322-323/Ч.Т.2.393)

ヴォーシェフは再び、かつて全ての全世界的な真理と人生の全ての意味が彼にだけあり他のところにはないのだという強欲な意義をもって行動していた活動家の身体に寄りかかったが、知恵の苦しみ以外、存在の疾走する奔流のなかの無意識と盲目的な分子の従順さ以外、何も得られなかった。

「ああ、汚らわしい悪党！」とヴォーシェフはこの沈黙している胴体の上でつぶやいた。「そうだ、これのせいで僕は意味を知らなかったんだ！お前は、僕じゃなくて階級全体を飲み干してしまった。乾いた魂め、そしてぼくらは静かな茂みのようにさまよい、何も知らないんだ！」

そしてヴォーシェフは活動家の額に一撃をくらわした。活動家の死を確固たるものにするためであり、個人的な意識的な幸福のためだった。

満たされた知恵を感じてヴォーシェフは、その根源的な力を宣言したり、行為として実行する能力はなかったが、両足で立ち上がりコルホーズに言った。

「これから、私はあなたの方のために悲しみます！」

「お願いします！」満場一致でコルホーズは言った。

ここで、ヴォーシェフが自分のことを形容する際の「静かな茂みのようにさまよい」という箇所に、飛散する花粉のイメージを見出すことができる。物体の浮動、その浮動における受動性、植物性、革命との関連性を跡付けることができるからだ。物語の進行についていえば、「полный ум 満たされた知恵」を感じることで、ヴォーシェフは、コルホーズの指導者として承認されている。「満たされた知恵」の内容はこの作品において語られることはない。この知恵に関して、次節では検討される。

6. ヴォーシェフの「満たされた知恵」

前節ではヴォーシェフが活動家を殴打したあと、「満たされた知恵」を感じたと述べた。ヴォーシェフのこの状態が唐突に生起しているのに対し、別の要素が、『土台穴』において次第に高まっていることを指摘でき、それがここにおける「満たされた知恵」の意味を考察する助けになる。それは、「満たされた полный」状態ではなく、「空っぽの пустой」状態である。

『土台穴』における「空っぽの」状態の体験、つまり空虚 пустота の体験は、この作品における階級闘争の進展とともに高まっていく。それはたとえば、次のように現われる。

- мы все живем на пустом свете[месте], - разве у тебя спокойно на душе? (.....) - Ты, товарищ Чиклин, пока воздержись от своей декларации, - с полной значительностью обратился Сафронов. - Вопрос встал принципиально, и надо его класть обратно по всей теории чувств и массового психоза... (K.248/Ч.Т.2.332)

「われわれはみな空の世界に住んでいるけど、あなたの心は本当に平静なのか。」

(中略) 「きみ、チークリン同志、さしあたり自分の声明は差し控えなさい」まった

く意義深くサフローノフは話し掛けた。「原理的に問題は生起しており、感覚と大衆の精神異常にかんする全ての理論にそってそれを元通り横たえねばならぬ」

問題を解決する、つまり除去する разрешить のではなく、「元通り横たえる」という言い回しで風刺がなされていると考えられるこの箇所において、チークリンは、自分たちが住む世界が「空っぽ」であることに不満を呈し、サフローノフは彼の問いをはぐらかしている。この箇所では、世界が「空っぽ」であることは、十分な分析を経ずに、否定的に扱われているとあってよい。プロレタリアートである彼らが感じているこのようは「空っぽ」さを、集団化に伴って弾圧され、私有財産を奪われた富農たちは、やや遅れて感じることになる。

次の引用箇所にあるように、財産を失ったらどうすればいいのか分からない彼らの心は、まさしく「空っぽ」だといえる。

неорганизованные же стояли на ногах, преодолевая свою тщетную душу, но один сподручный актива научил их, что души в них нет, а есть лишь одно имущественное настроение, и они теперь вовсе не знали, как им станет, раз не будет имущества. Иные, склонившись, стучали себе в грудь и слушали свою мысль оттуда, но сердце билось легко и грустно, как порожнее, и ничего не отвечало. (K.292/Ч.Т.2.367)

未組織の者たちは、自分の無意味な魂をじっと我慢して両足で立ったままでいたが、一人の活動家の助手が、魂は彼らには無くてあるのはただ財産からくる気分だけだと彼らに教え込み、財産が無くなる時彼らに何が起こるのか、彼らはいまやさっぱり分からなかった。ある人々は、かがみこみ、自分の胸を叩いていてそこから自分の思考に耳をすましたが、心臓は軽快かつ寂しげに、空っぽであるかのように鼓動していて、何も答えなかった。

プロレタリアートたちは、富農たちを筏に乗せて川に流したあと初めて、そのような「空っぽ」さを肯定的に受け入れることになる。

Колхозные мужики были светлы лицом, как вымытые, им стало теперь ничего не жалко, безвестно и прохладно в душевной пустоте. (K.305/Ч.Т.2.379)

コルホーズの百姓たちの顔は、洗われたかのように晴れ晴れとして、彼らにはいまや何も惜しまなくなり、無名になり、魂の空洞が涼しくなった。

とはいえ、ここで「魂の空洞 *душевная пустота*」を、私有財産への執着からの「解放」という文脈においてのみ捉えるのでは不十分だ。プラトーフにおける *пустота* (空虚) は、たしかに、何かの「不在」と関連付けられているが、それは既存の「何か」の不在だけではなく、いまだ出現せざるものの「不在」と関連付けられている。そのように考えることを許すのは、*пустота* (空虚) という語こそ出現しないものの、作品の冒頭でヴォーシェフが放浪する場面において、つぎのようなくだりがあるからだ。

Однако ему по-прежнему было неясно на свете, и он ощущал в темноте своего тела тихое место, где ничего не было, но ничто ничему не препятствовало начаться.

(K.230/Ч.Т.2.313)

しかし彼にはまえと同じようにこの世のものが不明確に感じられ、彼は自分の身体の暗闇に静かな場所があるのを感じた。そこには何も無かったが、何かが始まるのを何も妨げなかった。

ここにおいて、空虚 *пустота* に、未来への希望が込められているといえるだろう。何もない場所が生産性をもつ、ということがここで語られている。予測不可能なものとしての未来が、『土台穴』における空虚において肯定されているのだ。そのような考えは、プラトーフにおいて『土台穴』にのみ見られる発想ではないと指摘する研究者もいる。バルシトが20世紀初頭の科学的発見、とりわけアインシュタインの相対性理論につよい関心を持っていたプラトーフの1920年代の評論を分析しつつ指摘するのは、エネルギーが遍在しているという主張がそこに見られることだ。彼によればプラトーフは、エネルギーは世界に遍く存在しており、エネルギーが不在である場所があるように見えるのは人間の認識が不完全だからだと考えていた⁶⁷。『土台穴』におけるプラトーフは、もっと先にいっているといっている。Пустота という概念そのものに、「何もないという状態」という意味がそれ自体として変更されることなく、希望を託されているからだ。

⁶⁷ Баршт К. Энергический принцип Андрея Платонова: Публицистика 1920-х гг. и повесть «Котлован». // СФ4, 2000, С.257.

憂鬱なプルシェフスキーの悲観的な考えが述べられているつぎの箇所では、空虚 *пустота* に関して、希望というよりは絶望が語られているように見える。しかし、その絶望は、彼自身を含む旧世代が過去のものとなり「不在」となることのみに対するものであるがゆえに、未来に対するヴォーシェフの希望と対立するものではない。

(.....) ему лучше было иметь друзей мертвыми, чем живыми, чтобы затерять свои кости в общих костях и не оставить на дневной поверхности земли ни памяти, ни свидетелей, - пусть будущее будет чуждым и пустым, а прошлое покоиться в могилах - в тесноте некогда обнимавшихся костей, в прахе сотлевших любимых и забытых тел.
(K.273)

(.....) 自分の骨を全員の骨のうちに紛失し、大地の地表に記憶も証人も残さないために、生きた友人よりは死んだ友人を持つほうが彼には良かった。未来は無関係で空になるがよい、過去のほうは墓のなかで安らぐがよい、つまり、かつて抱擁しあった骨の緊密さのなかで、また、朽ち果ててしまった愛しくそして忘れられた身体の塵のなかで。

以上の考察を踏まえると、*пустота* は、『土台穴』において、新しいものの到来の可能性を保障している場所なのだといえるだろう。それは階級から開放されたのちの農夫にすがすがしさを与え、真実を求めるヴォーシェフに、最小限の情熱として現われる。積極的な性質をもたない、純粋な消極性である空虚は、言い換えると、そこにおいて何も実現してはいないという意味で、可能性の充実 *полнота* であり、この空虚が『土台穴』の世界に偏在している。そしてこの事実こそが、すべての存在に意味を与えようとするヴォーシェフの行動を、内面的に基礎付けてもいるのである。そして、それが、活動家を殴打したあとに、かつてなく高まった結果、ヴォーシェフは自らの空虚を充実と感じたと言えるだろう。それが、『土台穴』における「満たされた知恵 *полный ум*」なのだ。

7. ヴォーシェフの「社会主義的復讐」

前節では、ヴォーシェフが活動家を殴ったあとに感じた「満たされた知恵」を、空虚 *пустота* との関連において論じた。これは、予測不可能なものとしての未来に関連していた。このヴォーシェフの殴打を理解することを可能にする手掛かりは、もう一つあり、こちらは死者、つまり過去に関連している。

ヴォーシェフの行動を、一貫したものとして理解しようとするとき、抑圧された人やその痕跡としての物を集めることでそれに意味を獲得させる「社会主義的復讐」への待望が、このヴォーシェフの一撃において部分的にせよ叶えられていると考えることが、可能だと思われる。というのは、「*посредством организации вечного смысла людей добиться отмщения*(K.310/Ч.Т.2.382)人々の永遠の意味を組織することによって復讐をするため」になされている収集という作業において、熊が収集品に加わり、後に集団化された、つまり組織された人々が加わったという本章での論述が妥当なものであるなら、その組織された人々の代表として彼は活動家を殴っていると考えられるからだ。

ヴォーシェフの一撃の意味は、活動家に最初の一撃を与えたチークリンについて検討してみることでより明確になる。「*твоя рука работает, как партия [квалда]* (K.320/Ч.Т.2.391) お前の手は党として[ハンマーとして]働いたのだ」と、ジャーチェフは、チークリンが活動家を殴打した後に言う。このことは、活動家を非難する指令を読んで彼を撲殺したチークリンが、すでに分析したような、党の路線への従順さとしての、受難と結びついた受動性を備えた人間だということを示している。富農に、「*действительное лицо* 本当の人物」かどうか証明することを求められ、「*Я никто; у нас партия – вот лицо!* (K.303-304/Ч.Т.2.378) わたしは何者でもない、我々のところにおいては、党こそが人物 *лицо* なのだ！」と答えることに端的に現われているように、チークリンは、自らを無化している、つまり党によって意味づけられるだけの空虚な存在と自分をみなしている。それは、受難と結びついた受動性の、完成された状態である。したがって、活動家という一つの対象に向けられた一撃は、チークリンによるものとヴォーシェフによるものとは、まったく意義が異なっていると いわねばならない。チークリンの一撃は、党への従順さとしての受動性、あるいは党の路線に関与する限りでの能動性から現われた一撃である。それに対しヴォーシェフの一撃は、自然の事物や抑圧された人間を含む全存在から影響を蒙るという受動性、あるいはそれらの存在を一箇所に集めて組織することで意味を取り戻す「社会主義的復讐」という行為の

もつ能動性というから現われた一撃なのである。この二人の違いは、鮮やかに、作品の前半部分で、同じ動作をする二人の対照的な様子としてつぎのように描かれている。

И сказав это, Чиклин вонзил лопату в верхнюю мякоть земли, сосредоточив вниз равнодушно-задумчивое лицо. Воцев тоже начал рыть почву вглубь, пуская всю силу в лопату; он теперь допускал возможность того, что детство вырастет, радость сделается мыслью и будущий человек найдет себе покой в этом прочном доме, чтобы глядеть из высоких окон в простертый, ждущий его мир. Уже тысячи былинки, корешков и мелких почвенных приютов усердной твари он уничтожил навсегда и работал в теснинах тоскливой глины. Но Чиклин его опередил, он давно оставил лопату и взял лом, чтобы крошить нижние сжатые породы. Упраздня старинное природное устройство, Чиклин не мог его понять: [.] (K.233/Ч.Т.2.318)

そう言うと、無関心で物思いに沈んだ顔を下方に集中させ、チークリンは地面の表層の柔らかい部分にシャベルを突き刺した。ヴォーシェフもまたシャベルに全ての力を注ぎつつ、深く土を掘り始めた。彼がいまやありうるものと認めた可能性とは、幼年時代が現出し、喜びが思考に変化し、未来の人間が自分の喜びをこの堅牢な家に見出し、差し出され彼を待ち受けている世界を高い窓から眺めるといったことだった。すでに幾千もの草、根、そして勤勉な生物の小さな土中の隠れ家を彼は永遠に殲滅し、気が滅入るような粘土でできた隘路で作業していた。しかしチークリンは彼に先んじて、ずっと前にシャベルを置いてバールを取り、下のほうにある圧迫された岩石を粉々にしようとしていた。古くからの自然の構造を一掃しているチークリンは、その構造が理解できなかった。

上の引用においては、チークリンが、自分を掘削という行為のために犠牲にしつつ、地中の小動物や植物を気づかずに破壊している。ここにおいては、ソヴィエト政権に忠実なチークリンばかりではなく、土のなかに住む生物の生命が全面的に否定されている。それに対して、ヴォーシェフは少なくとも「太古からの自然の仕組み」が破壊されていることに対して自覚的である。そのとき、ヴォーシェフの懸念を根拠付けるのが、上に論じたような、「社会主義的復讐」と結びついた受動性および能動性であることは明らかである。

党への従順さとして現われる、『土台穴』における、受難と結びついた能動性と受動性が、それにたずさわるものを死に追い込むとしたら、ヴォーシェフの「社会主義的復讐」は、この作品でみる限り、犠牲あるいは受難をもたらさない。この点においても、死を倫理的な悪だと位置付け、不死を目指すフョードロフの思想と「社会主義的復讐」は親和性が高い。

この作品における悲劇性が集約された形であられるとすでに指摘したナースチャの死に直面しても、次の引用箇所にあるように、結局ヴォーシェフが希望を失わないのは、以上のような理由による。

Воцев стоял в недоумении над этим утихшим ребенком, он уже не знал: [,] где же теперь будет коммунизм на свете, если его нет сначала в детском чувстве и в убежденном впечатлении? Зачем ему теперь нужен смысл жизни и истина всемирного происхождения, если нет маленького, верного человека, в котором истина стала бы радостью и движением?

Воцев согласился бы снова ничего не знать и жить без надежды в смутном вожделении тщетного ума, лишь бы девочка была целой, готовой на жизнь, хотя бы и замучилась с теченьем [течением] времени. Воцев поднял Настю на руки, поцеловал ее в распавшиеся губы и с жадностью счастья прижал ее к себе, найдя больше того, чем искал. (K.327/Ч.Т.2.396)

ヴォーシェフは当惑しつつ、この静かになった子供を見おろすようにして立っていた。彼にはもう分からなかった。何よりも子供らしい感覚と確かな印象の中に共産主義がないのなら、今や世界のどこに共産主義がありえようか。何故、いまや彼に生命の意味と全世界的な起源の真実が必要なのか、真実が喜びと運動となるような、小さな誠実な人間がいないとすれば。

ヴォーシェフは、何も分からないでいることに、そして無益な知性の不安な熱情のうちで希望なしで生きることに再び同意しただろう、ただその少女が無事で、たとえ時が経つとともに苦しむとしても、生きる用意さえあったなら。ヴォーシェフはナースチャを腕に抱き上げ、その崩壊した唇に口づけをし、幸せをむさぼるように自分に

押しつけた。求めていたよりも多くを見出したのだ。

つまり、ヴォーシェフにとって、ナースチャの死によって希望が失われるのではなく、彼女の死こそが、救済への希望をいなく必要を感じさせるものとしてあるのだ。それは、「社会主義的復讐」が、受難を不可避なものとしなからこそ可能になった事態である。

以上、『土台穴』のヴォーシェフに注目しつつ、彼が環境において様々なものに触発される資質をもっていること、そしてそのような、感性の受容性としての受動性が、さまざまな物を収集するという行為の能動性へと結びついていることをみてきた。さらに、この行為はその対象を人間にまで拡大し、ヴォーシェフはコルホーズにおける指導者的な地位を獲得する。そこにおいて、「社会主義的復讐」がなされることも、ここまでの議論で検討された。

にもかかわらず、「社会主義的復讐」がフォードロフ的な理念と関連付けられるとしても、ゾロトノーソフが指摘している通り、こうした理念が作品において肯定されていると考えることは短絡的である。そうではなく、この作品において、「社会主義的復讐」の完全な実現としての「内在的復活」は達成されず、実際には、「名も無き人々」は死んだままにとどまったこと、そして、ヴォーシェフが「社会主義的復讐」をしたとしても、まさにその過程で活動家を殴打したことは、一般的に死を悪として否定するフォードロフの理念への否定を示していると考えられることも十分可能である。つまり、ここでは、スターリンに率いられた社会主義建設の過程における活動家や労働者たちの不条理な受難が描かれ批判されていると同時に、フォードロフ的な理念もまた不完全なままにとどまることで批判されていると考えることも出来る。

ゾロトノーソフは、『チェヴェンゲール』において一国社会主義の理念が、チェヴェンゲールの破滅という事件によって否定されていると考えられるとしても、ポリシェヴィキを批判したローザ・ルクセンブルクを崇拝するコピョンキンが、そのような崇拝を途中で放棄してしまうことに着目している。そしてこの長編小説において書かれているのはイデオロギー的な行き詰まりだと指摘しているが⁶⁸、『土台穴』においてもこのような行き詰まりを見出すことができるだろう。ヴォーシェフは「満たされた知恵」を感じて放浪をやめたが、逆説的なことにそれは行き詰まりでもあった。「偉大なる転換」の年を扱ったもう一

⁶⁸Золотонос М. Ложное солнце. («Чевенгур» и «Котлован» в контексте советской культуры 1920-х годов.) // МТ, С.247-248.

つのプラトーフの作品である『ためになる』は、このような放浪者が行き詰まりへと向かって歩く作品からの、プラトーフの転換を記すものである。

8. 『ためになる』における受難の否定

『ためになる』は『土台穴』と際立った対比をなしている。『ためになる』の分析を始めるにあたって、まずこの作品における *активность* と *пассивность* という語の用法について述べておこう。この分析が、『土台穴』と『ためになる』のそれぞれにおいて描かれている世界の違いを、端的に示してくれるからである。

『ためになる』における *активность* もしくはこれに関連する語が使用される例をみていこう。

コルホーズ「富農要らず」のクチュームに関して「私」がもらす批判（「Такая политика, в сущности, лишала возможности бедноту и лучшую часть середняков проявить свою *активность*. (K.191/Ч.Т.2.423)このような政策は、本質的には、貧民と中農のもっとも良い部分から、自らの能動性を見せる可能性を奪っていた」）では、能動性は自発性とほぼ同義である。中央からの指令が念頭に置かれているわけではないからだ。

村落「グーシェフカ」のウポーエフに関する箇所は二箇所ある。「Но Упов не верил ни кулаку, ни событию, он был неустойчив в своей *активности* и ежедневно тратил тело для революции. (K.197/Ч.Т.2.428)しかしウポーエフは富農も、出来事も信じなかった、彼は自分の能動性を押えられず、毎日、革命のために自分の体を消耗していたのだ」という箇所は、能動性は生命力と考えていいだろう。また、「Упов глянул на говорящих своим *активно* мыслящим лицом и сказал им евангельским слогом, потому что марксистского он еще не знал (K.197/Ч.Т.2.428)ウポーエフは、みずからの能動的に思考する顔でもって、語っている者たちに目をやり、福音書の言い回しで彼らに言うのだった。なぜなら、マルクス主義の言い回しを彼はまだ知らなかったからである」という箇所は、能動性は自発性を意味していると考えられる。なぜならウポーエフはレーニンに会ったことに勇気付けられはするものの、村の住民に対する彼の丁寧な指導は、指令と無関係に行われているからである。

無神論者のシェコトゥーフに関する箇所（「*Действительно, товарища Шекотулова, активно отрицавшего бога и небо, знали здесь довольно подробно. (K.203/Ч.Т.2.433)*実際、能動的に神と空を否定していたシェコトゥーフ同志は、当地ではかなり詳細に知られてい

た)でも、能動性は自発性を意味すると考えられる。なぜなら、彼が行う無神論についての説教はいかなる指令にも基づいていないからだ。同時に彼は農業経営にほとんど無関心であることからわかるように、党の路線に忠実であろうとする意志にかけているからだ。

コルホーズ「力強い奔流」のフィラトに話し掛ける議長に関する箇所 (「- Вот, - сказал активный председатель всему колхозу, - вот вам новый член нашего колхоза – Товарищ Филат. (K.214/Ч.Т.2.443) 「ほら」と能動的な議長がコルホーズ全体に向かって言った。「これがわれわれのコルホーズの新しいメンバーだよ、同志フィラトだ」)での能動性は、党への忠実さでも、自発性でもありうる。

そして最後に、“人類の朝”村のパーシュカの妻に関する箇所 (「Всем своим воспитанием и просвещением он был обязан исключительно своей жене, которая его довела до ума и активности. (K.219/Ч.Т.2.448) 彼は、自分がこれほど鍛えられ啓発されたのはすべて妻のおかげだと考えていた。彼女は彼を知恵と能動性に導いたのである」)に見られる能動性は、自発性と考えるのが適当であると思われる。

これらの用例を検討してみて明らかになるのは、『ためになる』における *активность* もしくはこれに関連する語は、主として全面的集団化との関連で用いられていた『土台穴』とは異なり、ここではそのような結びつきが弱いことである。むしろそれらの語は個人的な資質に関連が強い用法で用いられている。このことは、『土台穴』におけるような、全面的集団化への強制が、スターリンの論文『成功による眩惑』の結果弱まっていることに対応していると考えられる。

興味深いのは、すくなくとも今回使用したテキストにおいて、受動性 *пассивность* が一度しか登場しないことである。そしてその用例は、受勲英雄名称農業アルテリにおける集団化が進まないことに関する「私」の苛立ちにおいて出現している (「развитие пассивности в лучших людях бедноты (K.212/Ч.Т.2.441) 最良の貧農の人たちにおける受動性の発展」)。この用法は、自主性の欠如という意味で用いられているゆえに、『土台穴』におけるこの語の第一の用法に等しい (以上の用例の検討における強調はすべて引用者のものである)。

このような、『ためになる』における、語としての *активность* の優位という事態は、この作品における受難の位置付けとも関連している。『ためになる』においては、『土台穴』のように活動家やナースチャの死へと緊張感とともに収斂してゆくプロットはない。このような『ためになる』の特質を、端的に要約してくれるのは、コルホーズ「富農要らず」のクチュームが、自らのコルホーズに参加したいと考えてやってきた貧農たちに語る、次

の言葉である。

Истомиться у нас пожелал, [?] – уныло-недоуменно ставит вопрос Кучум. – Другую морщину нажать на лоб хочешь?

- Да хоть бы и так, Семен Ефимыч!

- Хоть бы и так? Нет, ты уж иди назад – нам мучеников не нужно. Помучайся лучше на своей усадьбе – [,], отмучаешься, тогда придешь. (K.189/Ч.Т.2.421)

「うちのところでへとへとになりたいのか」憂鬱で当惑した様子でクチュームが質問する。「もう一本おでこにしわが欲しいのか」

「はい、それでも大丈夫、セミヨン・エフィーミチ！」

「それでも大丈夫だって。だめだ、君後ろに下がりなさい—われわれには受難者はいらんのだよ。自分の敷地で苦しんだ方がいい。苦しみ飽きたら、そのとき来たまえ。」

(強調は引用者による)

そして、これに呼応して、『土台穴』における受難者の一人だった活動家を殴ることでヴォーシェフが感じるような、「社会主義的復讐」の頂点としての「満たされた知恵」が現われることもない。その結果、『ためになる』で現われるのは、上に概観したような、集団化が展開された時期のソ連における多様な現実の並列的な叙述である。第二章および第三章の議論で見たように、放浪者は作品の漸進的な変化の中で受動的な度合いを深めていくのだが、その放浪者の視点を通して描かれる世界は、必ずしも一貫して受動性や受難という主題に特徴付けられてはいないことになる。

上に述べたような、現実の並列的な叙述は、語り手たる放浪者の「私」が、ひたすら旅を続けることとしてなされている。この旅において「私」は、「満たされた知恵」を求めないが故に、『土台穴』において前節で指摘したような行き詰まりにいたることも無い。そのことで、作品の冒頭からヴォーシェフが感じていたような空虚(「тихое место, где ничего не было, но ничто ничему не препятствовало начаться. (K.230/Ч.Т.2.313)静かな場所、そこには何も無かったが、何かが始まるのを何も妨げなかった)）だけが残ることになる。「私」の飽くなき放浪は、この空虚に基礎付けられている。そのような「満たされた知恵」がありうるとしても、『ためになる』においては、それは遠い未来に先送りされている。そのこと

は、この作品の結末の、「私」が“人類の朝”村を出発する場面で次のように語られている。

Расставаясь с товарищами и врагами, я надеюсь, что коммунизм наступит скорее, чем пройдет наша жизнь, что на могилах всех врагов, нынешних и будущих, мы встретимся с товарищами еще раз и тогда поговорим обо всем окончательно. (K.222/Ч.Т.2.450)

同志や敵と別れるにあたって、私が望むのは、共産主義が、我々の生命が尽きるよりも早く到来し、現在と未来の全ての敵の墓の上で、我々が同志たちともう一度会い、そしてその時全てについて最終的に語ることである。

未来において想起することに希望を託すという、この態度は、『カラマーゾフの兄弟』の結末におけるアレクセイの言葉とよく似ている。その類似を裏付けるのは、未来への希望と同時にその場面でアレクセイが語った、幼年期の大切さという論点が、次のような形で、『ためになる』に登場することである。ここに引用するのは、「私」が、コルホーズ「善き始まり」で、人工的な太陽をめぐる騒ぎを眺めながらもらす感慨である。

Если бы таких обстоятельств не встречалось, мы бы никогда не устроили человечества и не почувствовали человечности, ибо нам смешон новый человек, как робинзон [Робинзон] для обезьяны; нам кажутся наивными его занятия, и мы втайне хотим, чтобы он не покинул умирать нас одних и возвратился к нам. Но он не вернется, и всякий душебный бедняк, единственное имущество которого – сомнение, погибнет в выморочной стране прошлого. (K.171-172/Ч.Т.2.406)

仮にこれらの事実に出会っていなかったら、我々は一度だって人類を築き上げることはなく、人間性を感じることもなかったろう、というのもわれわれには新しい人間はへんてこなものだからで、それはサルにとってのロビンソンのようなものだからだ。我々には彼のやっていることが子どもっぽいのにも思われる、しかし我々が密かに欲しているのは、彼が我々だけが死ぬままだに見捨ててずに我々のところに戻ってきてくれるということなのである。しかし彼は戻ってこないだろう、そして疑惑だけが唯一の所有物である魂の貧農はみな、過去の、相続者のいない国で死亡するのである。

ここでは、無人島で原始的な生活を始めようと奮闘するロビンソン・クルーソーが「新

しい」人間にたとえられ、そしてさらに「新しい人間」の幼年期について語られていると
いっている。そしてそれを成人の立場から眺めるのが、人間よりも進化の程度が低いはず
のサルであるという点に、プラトーフが革命に対して抱いていた見解が現われている。
世界を変革するという能動性を発揮しようとして、かえって自然より後退してしまった状
態を、プラトーフは集団化が進む時期のソ連にみている。

「新しい人間」に関する上述の引用箇所においては、一見、革命が見下されているよう
に見える。しかし、この箇所に現れているのは革命の否定ではないと思われる。なぜなら、
本論文の第三章での『ためになる』の冒頭の検討で見たとおり、ソ連においては誰もが革命
の参加者であり、ゆえにたんなる観察者であることは不可能だとされているからである。

本章においては、『土台穴』と『ためになる』における、人間と言語の関係に焦点を合
わせつつ、とりわけ『土台穴』において人間が政治的言説に強く規定されている様相を描
き出してきた。以上のような分析は、本論文第一章で示された飛散する花粉のモチーフの
例証を豊かにするとともに、第二章および第三章で描き出されたプラトーフ作品の漸進的
な変化の別の側面を照射することを可能にする。